

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月25日現在

機関番号：14602

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22720084

研究課題名（和文） 読本の主題形成における水戸学の意義

研究課題名（英文） The significance of MITO-Gaku in forming theme of the Yomihon

研究代表者

久岡 明穂 (HISAOKA MIHO)

奈良女子大学・大学院人間文化研究科・博士研究員

研究者番号：20437510

研究成果の概要（和文）：この研究では、近世および近代以降の文学にも大きな影響を与えた、曲亭（滝沢）馬琴の読本、ことに『椿説弓張月』等の史伝物読本と呼ばれる文学作品主題を検討した。馬琴の読本には、水戸学の思想、ことに神器と皇位継承に関する思想の影響があることを明かにした。

研究成果の概要（英文）：This research examined the theme of literary works which was authored by Kyokutei (Takizawa) Bakin and which belonged to what is called the Yomihon particularly Shiden-mono Yomihon such as "Chinsetsu yumiharizuki (The Crescent Moon). The Yomihon of Bakin has had big influence on the literature in the early modern times and after modern times. This research showed clearly that the thought of MITO-Gaku, particularly the thought concerning the succession of the Three Sacred Treasures and the Imperial Throne, exerted a great influence on the Yomihon of Bakin.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：日本近世文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：江戸・読本・思想

1. 研究開始当初の背景

これまでの近世読本研究は、中国白話小説との関係などを考究する読本発生論、作品の典拠研究および作家・書肆研究などが行なわれているが、上田秋成と国学、都賀庭鐘と徂徠学の研究などの他には、後期読本の曲亭馬

琴も含めて、思想史的視点からの研究は十分に行なわれていないと思われる。しかし、申請者は馬琴を中心とする後期読本と水戸学の関係について研究することは、読本研究に必須のことと考えている。

馬琴読本では、前期水戸学の学者の文献（栗山潜鋒『保健大記』など）の引用は行なわれてきたが、水戸学の思想との直接的な関連を指摘するものはなく、したがって近世読本と水戸学自体との関係についての包括的な研究は行なわれていない。近世読本が武家の時代の近世（江戸時代）の作品であり、その読者が当時の知識人や武家が中心であったこと、水戸学は後期読本が盛んであった江戸時代後期に最も新しい思想であり、かつ武士や国について考えた思想であったことなどから、武士が登場する近世読本には、当時の新しい思想である水戸学との関連も与っていたと考えられる。本研究は、このような状況を踏まえて、近世読本と水戸学の関係について、包括的な研究を行なうものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、読本、特に近代以降の文学にも多くの影響を与えた曲亭（滝沢）馬琴の史伝物読本（歴史上の人物を題材とする作品）の主題の検討を中心に、歴史研究をもとに築かれた水戸学思想と歴史を題材とする文学ジャンルである読本との関連を検討することである。

具体的には、第一に、周辺事項の確認として、馬琴と水戸学の人物との関係と馬琴がどのような水戸学思想を知り得たかという、馬琴の創作環境を、先行研究を踏まえて整理する。

第二に、読本にあらわれる思想を明らかにする。そのため、まず、作品論の視点から、特に馬琴が作品で取り上げる対象とした歴史と完成した作品との比較検討を行うことで、作品で描かれる主題を明らかにする。その際、「考証」することによって見出した歴史の空白・可能性に創作（「虚」構）するという馬琴の創作方法を踏まえることで、典拠となる歴史書にない馬琴独自の部分を明らかにす

る。次に、作品の主題に関連する歴史における問題点が何かを検討する。さらに、作品でとりあげられる主題と思想史における重要な文献との見解の類似・相違を明らかにする。

第三に、思想が作品にあらわされることにより、どのような文学的意義があるのか、またその表現においてどのような工夫がなされているかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、大きく二つの柱によって行う。第一に、文学・思想史の人物関係や周辺環境についての先行研究を利用することにより、馬琴読本と水戸学との間をつなぐ部分に応募者の研究の力点を絞る。

第二に読本の内容と水戸学思想との関連については、内容の検討を重視する。文学研究において本文テキスト重視はいうまでもないことであるが、そのため文言の一致不一致のみに決め手がおかれ、実際の内容上関連がないものが重視されたり、思想的に影響を受けているものが見逃されたりすることもありうる。本文テキストとともに内容を解釈し抽出したものを比較することにより、馬琴史伝物読本を江戸時代末期という時代における意義とともに史的意義を考察する。

4. 研究成果

①同志社大学蔵の郵書目録については、約半分を翻刻し、随時入力を行った。読みにくい人名、不明の人名が多いため、同時代の人名がわかる他の資料を使って修正を進めている。

②読本と水戸学との関連を主題の上から考察するにあたり、馬琴の『頼豪阿闍梨怪鼠伝』の頼豪の霊の描かれ方を検討した、

曲亭馬琴作『頼豪阿闍梨怪鼠伝』は、文化五（1808）年に刊行された中編読本で、木曾義仲の子、木曾義高が父義仲の仇として源頼

朝を狙う物語である。作中で、木曾義高は、鼠の妖怪となった頼豪阿闍梨の怨霊が取り憑いたとされている。

この作品の検討では、馬琴の怨霊に対する考え方と、国家と武士（将軍）の存在意義についての考え方が明らかになった。具体的には以下の通りである。

第一に怨霊については、人間が怨霊に取り憑かれる原因として、欲が高じて、自らの存在意義を失うまでになった時と描かれている。霊とは偶発的に生じるものではなく、作品で描かれる人物の心が本来の目的を越えて、欲に支配された時に出現したものであると論じた。人間の死後については、江戸時代には、馬琴が参考にした新井白石をはじめ、本居宣長などの国学者の間でも重要な議論がある。当時の人々の霊について思想の一つとして示されるものでもある。

第二に武士の存在意義についてである。馬琴は作中で「家に鼠あり、国に賊あり」ということわざを書いている。本作品では、天台宗の中にありながら経典を噛み破り天台宗を壊そうとする頼豪の伝説を踏まえて、源氏の中にありながら天皇や国家の安全を守るという源氏の家が存在意義を壊そうとする義仲が描かれる。つまり、馬琴は、武士とその代表である将軍を単に武力によって権力を手に入れることではなく、国家の安全を守るための存在として考えている。

③馬琴以外の作家としては都賀庭鐘の『莠句冊』第三編について検討した。そこでは、都賀庭鐘が、古代国家を具体的に『日本書紀』の神話に描かれる国家をもとに造型していることを明らかにした。

『莠句冊』第三編では、住吉神社のような数カ所に存在する神社をどう扱うかという問題も含まれている。異なる地でも祈る者のところに神が訪れるという神道独特の思想

があらわされていることを明らかにした。

④曲亭馬琴作『椿説弓張月』の琉球国の「みづちの珠」と記紀神話の「三種の神器」について検討した。

『椿説弓張月』では、王位（皇位）継承がテーマとして扱われている。作中で日本の「三種の神器」に相当するとされている琉球国の「みづちの珠」が重視されていることに着目した。

まず、三種の神器についての思想を歴史的な流れの中で確認した。「神器」は、記紀神話の時代から認知されるものであるが、実際には、それぞれの起源や三種についてなど『日本書紀』成立当初か注目されていたわけではなく、時代時代の事件がきっかけとなって注目される機会が重なって認識が高まったと考えられる。

特に、平安時代に御所が火事にあった時、源平合戦中に剣が海に沈んだ時、南北朝時代に南朝の後醍醐天皇が先に自分が渡した神器は本物ではない、と言った時など、神器の紛失や存在に危機が及ぶことが契機となり、注目されるが多かった。

そのような背景の中で、江戸時代には、南北朝の後醍醐天皇の神器の問題が水戸藩の『大日本史』編纂の重要な論点となり、水戸学の歴史書『保建大記』の神器思想が生まれた。馬琴が神器の紛失を作品の重要なテーマとして描いていることから、この著作の影響を受けて、『椿説弓張月』を創作していることを指摘した。

『保建大記』の神器思想とは、神器を持つ者を正統な後継者とする、たとえ神器を守るためであっても、別の神器を作る行為自体が神器を汚る行為であるとして批判するという思想である。

馬琴の『椿説弓張月』にもこのような思想が見られる。馬琴は作品を通して、血統的に

正統であることや善人であることと、王位（皇位）を継承する資格を有することとが別の次元の資質であることを描いている。王位（皇位）継承の資質とは、神器とそれに象徴される国家の安泰を守ることであると示している。このような思想が見えることから、馬琴作品の解釈には江戸時代特有の思想が関連することがわかった。

文学作品の創作方法としては、馬琴は、「みづちの珠」を「三種の神器」になぞらえて描くことにより、『椿説弓張月』の琉球国全体を日本の歴史に見立てるという方法をとっていることがわかった。別の国の歴史に置き換えて架空の話として描くことで、問題を抽出し読者に見せる効果を持っている。この方法により、馬琴が、歴史上の人物に対する個別的批判を大きな歴史の流れの中での位置づけとして批判し、読者に考えさせる効果を出していることがわかった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

①久岡明穂、「頼豪阿闍梨怪鼠伝」、鈴木健一編『鳥獣虫魚の文学史』（三弥井書店）査読有、pp. 330-344、第1巻 獣の巻、2011年

②久岡明穂、『^{ひつじくき}莠句冊』の求冢俗説の海伯と『日本書紀』の海神、『叙説』、奈良女子大学国語国文学会、査読有、第38号、pp. 239-247、2011年

〔学会発表〕（計1件）

①久岡明穂、「虬の珠」と「三種の神器」—『椿説弓張月』論一、日本近世文学会夏季大会、於明星大学。2012年6月24日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

久岡明穂 (HISAOKA MIHO)